書　評

高橋浩一郎著「総観氣象学」

1969年2月刊　　岩波書店　　¥1,800

「僕独自の，僕自身が気に入った気象学の本を書いてみたい」と，著者高橋さんがもらしたのは，もう10年以上前だったと思う．著者は忘れているかもしれないが，私（久米）は憶えている．

で，――『総観気象学』という表題をみたとたん＜あれだナ＞と直観して，早速通読し，大変感動した．内容もさることながら，全編を通して著者の言わんとしていることに，ピーンと共感したからである．

著者の自序によれば，著者は7年間想を練った由であるが，著者の想は，日本の風土のなかに，その歴史をはじめた日本人にはじまり，東アジア・北西太平洋から全球へひろがり，惑星系からさらに宇宙への余韻を残している．壮大であり，しかも今日的である．

第1章序説から第12章気候変動までの配列をみると，著者苦心のあと歴然として，おそらくは著者，この配列をきめるまでに，深夜ひそかに何回となく，いやひょっとすると何十回も，各章各項の順序を入れかえてみたに相違ない．総観気象学の全貌を掌握しつつ，しかもそれを，＜俺独自の構想で，俺の気に入ったようにならべ，気に入ったように書く＞という著者の面目が躍如として全編を貫いている．

385頁と，手ごろな一冊にまとまっているが，ところどころに，惜しくも筆をとどめたと思われるところがあって，あるいは著者は，1000頁くらいの大冊に，書きたいだけ書きたかったのではないかとも思うが，多分あまりに大部冊になることをおそれて，敢えて打切ったのであろう．

気象現象を論ずるのに，時間空間のスケールを分けることは，もともと気象学の方法の進歩それ自体から生まれたもので，著者も先ず第2章で，それを論じているが，著者は，それはそれとして，別途全編を通じ，人間の生活，人間の一生，人間の歴史における時間空間のスケールと，自然環境の時空スケールとの関係を，「総観」的に論じようとしている．どうも著者の本心では，もっとはっきり言いたかったのを，すこしテレて，口ごもってしまったようにみえる．満々たる自信を秘めながら，最後にちょっとモゴモゴと遠慮してしまう著者の人柄が，そのまま著書にでている．

一つ意外だったのは，著者が自序のなかで，この本を前著「動気候学」の書き改めとして，意図したように述べていることである．著者の「動気候学」は，他に類をみないまったくユニークな名著で，あれはあれとして，絶版にしないでもらいたいと思う．私はいままで，気象学特にお天気のことを勉強したいという人には，「高橋さんの動気候学を是非一度お読みなさい，あれは日本のお天気のなかから生みだされたほんとうの本です．」と言っていつも勧めてきた．著者が若き日，春夏秋冬に分けて，次々と気象集誌に投じ，私が感動して呼んだ論文の集大成だったからであり，その迫力と新鮮さは，今日もなお少しも色あせてはいないからである．

著者としては，あるいは今度の本で置きかえたいのかも知れないが，私は「動気候学」は「動気候学」，今度の本は今度の本として，それぞれたがいに独立の価値を持っているように思う．内容だけを機械的に比較すれば，たしかに重複があり，今度の本は，前著の上に立って，さらに大きく広く展開されたものと，言えば言えないこともないが，全編を通しての感じは別のものである．お天気の勉強をするには，2冊とも必要である．

著者はおそらく今後さらに大胆に，今度は口ごもらずに，人間とその環境という自然の二つの部面を，統一的に論じたフィロソフィカルな本を書きそうな気がする．楽しみである．　　（久米　庸孝）